

日本薬剤学会第 37 年会在 5 月 26～28 日にオンライン開催

薬剤学のレジェンド集結、次世代へ夢託す

年会長の京都薬科大学薬剤学分野教授の山本昌氏に意気込みを聞く

日本薬剤学会第 37 年会在 5 月 26～28 日の 3 日間、オンライン開催される。2022 年 1 月中旬までは京都市観覧館「みやこめっせ」で現地開催の予定であったが、新型コロナウイルスのオミクロン株による感染再拡大を受けて、第 36 年会上に続きオンラインのみでの開催となる。年会長を務める京都薬科大学薬剤学分野教授の山本昌氏は「3 年連続で対面での現地開催ができないことは非常に残念。しかし、薬剤学分野の研究の灯を絶やさないように、研究発表の場を設けていく。」と力強く語る。



この数年で薬剤学分野の世代交代が進む

第 37 年会のテーマは「昭和、平成の薬剤学のレガシーと令和の薬剤学の将来展望」。この数年で薬剤学分野の著名な研究者が定年退職を迎え、さらにこの 2～3 年のうちに、第一線で活躍している研究者の定年が控えている。「薬剤学分野の多くの教員が入れ替わることが予定されている。そこで本年会では昭和、平成時代にご活躍されてきた先生方に昭和、平成の薬剤学をまとめていただくとともに、今後、令和の時代に活躍が期待される若手の先生方へのメッセージとして令和の薬剤学を展望していただくこととした。テーマの選定にあたっては、レジェンドの登場は第 40 年会などの節目のときでもよいのではという意見もあったが、私が年会長のときに薬剤学を一度総括したいと思い、決定した。」と山本氏はテーマ選定の背景を紹介する。

この趣旨に則り、特別講演では杉山雄一氏（現 城西国際大学薬学部）と橋田充氏（京都大学）が、招待講演では竹内洋文氏（岐阜薬科大学）、乾賢一氏（京都大学・京都薬科大学）という薬剤学分野のまさにレジェンドと言われる研究者が登壇する。

また、特別企画シンポジウムでは「夢を託すシンポジウム」「レジェンドが語る薬剤学の回顧と展望」など 3 題が予定されている。これらのシンポジウムには岡田弘晃氏、上釜兼人氏、佐々木均氏、菊池寛氏、小田切優樹氏、林正弘氏、杉林堅次氏、寺崎哲也氏、勝見英正氏、片岡誠氏、川見昌史氏、山田勇磨氏、高橋有己氏など、著名人が講演する。

年会では上記の講演のほか、薬剤学分野の最新動向や研究成果も発表され、「消化管吸収改善」や「デジタル・トランスフォーメーション」「Advanced Manufacturing／連続生産と最新医薬品製造技術」「小児用製剤」「国産の革新的ワクチン開発」「核酸・遺伝子創薬」のプログラムも企画されている。

「ラウンドテーブルセッション 4 はオーガナイザーの白坂善之氏、上林敦氏の主導でテーマを“令和のビジョン委員会が「昭和、平成の薬剤学のレガシー」をぶっ壊す！～令和のグローバル視点で挑む製剤－製剤－臨床連携による創薬ブースト～」という年会テーマに挑戦するようなテーマを掲げている(笑)。いずれにせよ魅力的なプログラムが構築できたと自負しているのでホームページ等をご参照いただき、参加していただきたい。」(山本氏)。

次回こそは対面形式での年会を目指す

第 37 年会が京都で開催されれば、2004 年 3 月に京都大学の橋田充氏が第 19 年会を主催して以来の 18 年ぶりということもあり、山本氏も非常に気合が入っていたという。「熊本で開催予定であった第 35 年会は誌上開催、徳島での第 36 年会はオンライン開催であった。しかし感染拡大が収束傾向であったため、昨年 12 月には懇親会も開催できるのではないかと思い、400 人規模が入ることができるホテルも予約したのだが。しかし参加者の安全確保を考慮して懇親会は断念、講演等はリアルで開催できるかどうかギリギリまで議論したがそれも断念することになった。ただ、皆様のご協力もあり、協賛企業様に前回と同規模以上にご協力いただけたことに感謝している。先ほど、この数年で薬剤学分野の世代交代が行われると述べたが、実は私も 1 年後に定年退職を迎える。ぜひ 2 年度の第 38 年会 は対面形式で皆さんとお目にかかって薬剤学の未来について議論できれば。」(山本氏)。

第 37 年会の詳細はホームページ(<https://www.apstj.org/37/>)を参照。